

【足立区地域自立支援協議会こども部会】会議概要

会 議 名	令和5年度 【第3回足立区地域自立支援協議会こども部会】
事 務 局	福祉部 障がい福祉センター
開催年月日	令和6年1月30日（火）
開催時間	午後2時00分 ～ 午後4時00分
開催場所	障がい福祉センター 5階 ホール
出席者	小谷 博子部会長 佐藤 奈緒委員 酒井 康年委員 五十嵐 雅美委員 相澤 政子委員 寺山 早苗委員 相澤 まり子委員 川松 佳緒里委員 古里 宏子委員 設楽 寧子委員 梶原 里美委員 山本 克広委員 工藤 優子オブザーバー（竹の塚保健センター）
欠席者	小長井 亜希子委員 辰田 雄一委員 橋本 太郎委員
会議次第	1 開会 障がい福祉センター所長挨拶 経過報告 2 議事 （1）報告 （2）部会長挨拶・話題提供 （3）今期のまとめについて （4）事務連絡 3 閉会
資料	1 こども部会次第 2 令和5年度第2回こども部会会議録案 3 東京未来大学インクルーシブひろば チラシ
その他	公開状況：公開 傍聴：2名

様式第2号（第3条関係）

1 開会

【司会】

定刻になりましたので、地域自立支援協議会第3回こども部会を始めさせていただきます。

なお、この自立支援協議会は発言等会議内容及び発言者名などを後日議事録として公開いたします。また議事録作成のため、事務局にて録音をさせていただいております。ご了承願います。

第3回開催にあたり、障がい福祉センター所長山本よりご挨拶をさせていただきます。

【山本委員（障がい福祉センター）】

みなさま、こんにちは。障がい福祉センターあしすと所長の山本でございます。昨年中は大変お世話になりました。本年もよろしくお願いいたします。元旦から能登半島を中心とした大震災があり、一刻も早い復旧・復興を願うとともに、お悔やみを申し上げます。足立区としては、これまでの災害対策、たとえばスマートフォンで安否確認をするシステム等を構築してきましたが、今回の大震災ではスマートフォンが通じないという事例も見受けられましたので、そのような場合どうするかといった、見直しを進めていきたいと思っております。皆様方には、本日2年間の協議会のまとめ、振り返りも含めてお子さんの誕生前から成人するまでの切れ目のない支援についてご協議いただきたいと思います。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

【司会】

続きまして私より今期の経過報告をさせていただきます。本日は今年度3回目のこ

ども部会であり、また令和4年度より引き続いての今期の締めくくりの回でもございます。令和4年度はコロナ禍であり、書面開催でスタートいたしました。みなさまからのアンケートを集計し、各機関の現状や課題を共有いたしました。また、地域アドボケートの機能や役割についても認識を共有し、求められるのはどのような場面が多いのか等具体的に意見交換をしました。さらに、現状での情報不足を補い協議を深めるためにオブザーバーにも参加していただきました。今年度も引き続きご参加いただいております。今年度はまずこども家庭庁開設にあたって小谷部会長よりこども施策についてご講義いただき、学びを深めました。また、切れ目のない支援について分科会形式で意見交換をしました。その中で、こどもを中心に据えて様々な垣根を取り払った横のつながりが重要であるという共通認識をしました。みなさまのお手元でございます、第2回こども部会の議事録案をご確認いただければと思います。簡単ではございますが、以上経過報告とさせていただきます。

2 議事

（1）報告

続きまして本日の議事に入らせていただきます。はじめに前回の部会の内容を受けて、各御所属でお話しいただきましたことをご報告いたします。

【小谷部会長（東京未来大学）】

お話の前にご説明いたします。前回の協議の際に、分科会の協議内容が全体会で十分共有されにくいということがあったため、あらためて本日ご報告いただくということになりました。特に保護者の方の声について共有できたらと思い、お願いいたします。

た。足立区手をつなぐ親の会佐藤委員から
よろしくお願いいたします。

【佐藤委員（足立区手をつなぐ親の会）】

前回のグループは、民生委員の相澤政子
委員、工藤オブザーバー、事務局職員等でした。まず、入口は保健センターからというところで、保健師は小さい頃は見ていたけれど、一度離れてしまうと、その後は精神を病んで等で来られるようになるので、そのあ
いだがとんでしまうということでした。こ
ども支援センターげんき（以下 げんき）
は、学校ともすごく連携していると思いま
した。げんきで療育が必要となったお子さ
んがあしすとのひよこにつながってという
ながれができていると思うので、息子は2
0歳過ぎなので、10年前と比べると切れ
目のないつながりのある支援がされている
と思います。

一方で、通常学級に通っている方で、不登
校が増えたり、居場所がない子の支援をも
っと考えていく必要があると思います。

それから、前回同じグループだった相澤
政子委員は、放課後等デイサービスで働い
ていらっしゃるということで、最初は元気
なこどもたちを追いかけまわして体力的に
無理と思われたが、そうこうするうちにだ
んだんかわいく思えて、楽しく支援されて
いるというお話がとてもすてきだと思いま
した。地域の公園にもどんどん行かれて、交
流しているというのがいいなと思いました。
お仕事として障がい者と関わっている方が
一番の理解者であると思います。

こどもが保育園に通っていたころのことを
思い出すと、うちだけ違うということで
嫌な思いをしたということが思い出されて、
親が嫌な思いをしてもそれがこども自

身の成長に影響がなければいいのですが、
あまり追い詰められると虐待になってしまう
のでそれは防がなければいけないと思いま
す。周りの理解がないと周りの目を気に
して恥ずかしくなるとこどもをあまり外に
連れ出さないとすると、こども自身の経験
不足につながってしまうので親自身の障が
いの理解をすすめることが必要だと思いま
す。最近、精神障がいの方のご家族のお話を
聞く機会がありましたが、中高生ぐらい
で発症する方が多くて、私も知らなかった
のですが、治らない方は治らないというこ
とで、ずっと障がいを抱えて、ご家族も苦労
されているということで、小学校の段階か
ら精神障がいについて知る機会が必要だと思
いました。

多様性の理解、優生思想からの脱却、合理
的配慮を広げることが必要だと思っ
ています。また、手をつなぐ親の会は知的障
がい者の団体なので、特別支援学校に通う
子が多く、私は都立花畑学園の学校運営連
絡協議会にも参加しています。特別支援学
校はとても良い環境でみんな居心地よく過
ごしています。学校の周辺の地域との交流
や学生との交流も実施していて、今年度は
1,000名近く来校しているとのことで
次世代の人材育成にも貢献していてすごい
なと思います。

自分が住んでいる地域での交流は家族が
準備してやっていく必要があると思います。
生涯学習振興公社の評議委員会にも出てい
ますが、そこで実施されている「あだち放課
後子ども教室」では各学校で放課後こども
たちが地域の方の見守りのもと遊んでいま
す。特別支援学校に通っている子も参加で
きないか聞いたところ、最初は「在籍の児童

でないが無理ですよ」と言われたが、足立区の地域保健福祉推進協議会の際に副籍という制度があるということで聞いてみたところ、教育関係の方から「副籍の子も地域の子だよ」とおっしゃっていただいて、試験的にですけれども、特別支援学校に通うお子さんを連れて副籍交流している学校の放課後子ども教室に参加させてもらっている方もいます。いろいろ規約を変更しなければいけないので、そこから進んではいないのですが、ちょっとしたところから地域交流が広がっていくといいなと思っています。

テーマに戻って「足立区で障がいのある子どもたちが一生穏やかに過ごすために、こども時代に何をすべきか？地域でできることは何であるか？」ということここでは協議するということですが、親の立場からすると、こども時代に何をするかで一生が左右されるのかとプレッシャーに感じました。以上です。

【司会】

佐藤委員、どうもありがとうございます。次に一般社団法人ねっとワーキング、川松委員、お願いいたします。

【川松委員（ねっとワーキング）】

このテーマについて、ほかのメンターにも話を聞いてきましたので、お話しします。まず、一つ目は佐藤委員からも経験不足という言葉がありましたが、その子なりに受けとめられる経験がある程度しておくことがすごく大事だということを話し合いました。特に、安心できる環境で失敗して、失敗しても大丈夫だったという経験がすごくあとあと必要になってくるかなと思います。私の重度の知的障がいがある息子は今24歳ですが、特別支援学校は手厚いので、担任の先

生や、失敗してもいろいろ立ち直らせてもらえる人の手も目も、たくさんありました。その中で小学部の頃に、うちの子は「こうやったら？」と言うとその通りにできる子だったんですけれども、あえてそれをさせない先生がいて、その時私はまだ理解不足で、なぜ先生はうちの子がわかるように指示をしてくれないのだろうと疑問に思ったことがありました。あとは忘れ物をしてうちの子が少し動揺している時に、わざと「あれはどうした？」と聞いたりすることがあって、なぜ先生はあえて聞くんだろうということがあったのですが、忘れちゃっても大丈夫なんだということを教えてくれた、そういう経験を積みかせてくれました。また給食の配膳も、おぼんはおぼんで全員に配る、牛乳は牛乳で全員に配るのが早いのですが、うちの子はそれがわからないのでおぼん、牛乳と一人ずつ配ってとても時間がかかって、そういうことを自分で経験してから、そうじゃないやり方のほうが早いのかもしれないとか、たぶんそういうところが人の話を聞くきっかけになったりと、最初から正解だけ教えるのではなくて、経験をさせるということにすごく意味があるのだと思います。また、うちの子のような自閉の子は、やっぱり変化を認めたくないの、ある程度こわしてあげるといいうのも必要なかなと思います。ただもちろんすごく嫌がっているのにこわしてしまったりすると、二次障がいにつながるようなフラッシュバックが起きてしまうので、バランスを考えながらだと思います。コミュニケーションというのはすごく大事ななと思っていて、言葉だけでなくアイコンタクトとか、阿吽の呼吸とか、たとえば水が欲しい時、手を出して要

求を示すのもコミュニケーションだと思えます。すごく印象に残っているのが、うちの子は言葉が5歳くらいでいきなり3語文というような出方だったのですが、当時私はわが子が何を言っているのかわかったのですが、ほかの人はわからなかったのですね。なぜほかの人はわからないのかなと思っていましたが、5歳ごろに受診した時に、医師から「これがすごく大事で、べらべらしゃべっていても何を言っているかわからないとか、意味のないキャラクターとかを言っている子のコミュニケーションと、会話というかお母さんや家族とやりとりができてると、ゆくゆくすごく変わってくる」と言われました。成長してから「こういうことかな」と私の中で納得のいくことがあって、やりとりの意味がわかるとほかの人の存在もわかるし、助けてくれるとか自分が助けてあげるということの意味もわかるので、言葉だけではないコミュニケーションもとれるように無理のない範囲でしておくことが必要なのかなと思いました。これはほかのメンターも同様に言っていました。また、こども時代には、父親もですが特に母親の状態がこどもに与える影響が大きいと思っていて、母親が自分を保つ何か自分なりの活動をするとか、母親が落ち着くということがすごく大事だと思います。ある児童発達支援事業所でペアレントメンターのお話をさせていただいたときに、その場に来てくださったお母様が、ふだんなかなか困り事を話せないでいたようなのですが、私たちメンターの体験談を聞いて、「自分も困っている」ということを話してくれたことがあります。後日事業所の先生から、「お母さんがリラックスできるようになって、こども

も落ち着いた」とうかがい、やはりお母さんが向き合う余裕というかそういうのが大事だと感じました。また、地域の資源については、情報がないと使えないと思うので、たとえば障がい児・者のスポーツの機会は区内でたくさんあるので、そういう機会を使って、もし気に入ったものがあれば長く続けることでそういった活動も穏やかに過ごすための一助になると思います。また、ペアレントメンターのようなサポートをなんでも話せる場所として使っていただけたらいいかなと思います。さらに、放課後等デイサービスも地域の資源として思春期まで通うことが多いと思うので、親以外のその先生・スタッフなどが親御さんと一緒になって見守っているということも大事だと思います。

佐藤委員の話にもありましたが、副籍については、今どうなっているかはわかりませんが、うちは中学の時に一人通学の見守りとしても副籍の中学校の先生に目をかけてもらって、いいかたちでの交流ができて大事な経験になったということがあります。

【司会】

川松委員、ありがとうございました。

最後に、本日は所用でご欠席ですが、足立区肢体不自由児者父母の会の小長井委員からいただいている書面がありますので、代読します。

【小長井委員】（司会代読）

横や縦の連携について

① 東京都肢体不自由児者父母の会連合会に加盟

東京都への要望、定例会議（8月、1月以外毎月開催）や研修大会、講演会、ブロック情報交換会、新年会等に参加する。

関東甲信越肢体不自由児者父母の会連
合会 7 月開催の大会に参加。

- ② 全国肢体不自由児者父母の会連合会
年 1 回開催される全国大会に参加、ほか
イベント等に参加。
- ③ 各施設での保護者会開催
- ④ 交流会開催（年 1 回）
- ⑤ その他、有志による手作りサークル・ス
トレッチやコーラスグループでの交流
今後も父母の会として様々なつながりを
大切に、交流を続けていけたらと考えてお
ります。

【司会】

ご報告いただいた委員の方々、ありがと
うございました。

次に、東京未来大学小谷部会長からご挨拶
をいただき、ここからの議事の進行、今期
のまとめをお願いいたします。

（2）部会長挨拶・議事

【小谷部会長（東京未来大学）】

みなさん、こんにちは。東京未来大学こ
ども心理学部の小谷と申します。今日はお忙
しい中、会議にご参加いただきましてあり
がとうございます。本学もようやく卒業研
究発表会が終わったところです。3 月に卒
業する 4 年生の学生が 9 人いるのですが、
福祉系に就職する学生が多くおり、教員と
してもうれしく思っています。具体的に申
し上げますと、放課後等デイサービスや児
童発達支援に就職する学生が 5 名、児童養
護施設に 1 名、介護施設 1 名、一般企業に
2 名が就職することになっております。ま
た本学には、私の所属する心理専攻の他、保
育・教育専攻というものがあまして、教員
養成を行なっているのですが、これまで東
京都に採用される学生は年に 2、3 人だっ

たのが、今年度は 21 人もいて、大変驚いて
います。本校は教員養成校という立場です
ので、東京都で学生を多く採用してくださ
り大変ありがたいのですが、そもそも東京
都の教員採用の倍率が 1.1 倍ということ
に驚いています。多くの先生が休職されたり
、退職されているようです。本学の事務職
員の中にも、2～3 年間教員として働いて
転職で本学に来ているものもいます。学校
のシステム自体が、教員が疲弊するシステ
ムになってしまっていることに危機感を感
じています。現場は本当に大変な状況なの
でしょう。

また、皆様ご存知のように、一昨年、国連
から日本はインクルーシブ教育を実施する
ように勧告を受けています。この報道で現
場の先生も混乱されているのではないでし
ょうか？ 私も大学として何ができるのか
と日々模索しています。新しい時代に向か
って学生たちに、インクルーシブ教育につ
いて考えさせる取り組みをしています。本
学は、心理専攻と保育・教育専攻が一つの学
部の中にあるので、授業の中で、「児童発達
支援」で働く児童指導員の卵と「保育園」の
先生の卵の学生が一緒になって、「インクル
ーシブ教育とはどうなのか」という議論を
する授業を始めたところです。また、人工呼
吸器のついているこどもが学校や保育園に
通える環境を整えるために、足立区の協力
を得て、喀痰吸引実習を学生 300 名ほど
が体験しました。国が始めようとしている
新しい仕組みに向けて、大学も準備を進め
ているところです。

インクルーシブ教育については、国が世
界の流れに乗っていくのか、日本独自のや
り方で進んで行くのかというのが、この 2、

3年で問われていくと思います。

また、先週金曜日、教員や保育士など子どもと接する職に就く人に性犯罪歴がないことを確認する「日本版DBS」創設法案についての報道があったばかりです。子ども家庭庁ができたことで、ここ2、3年で日本の子どもへの支援が大きく変わることが期待されます。

ぜひ足立において、子どもが育っていく現場にかかわる人間同士が集まって、意見交換ができればと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

では、早速ですが、みなさんからご意見をいただきたいと思います。先ほど三人の方のお話を伺いましたので、最初に花畑学園の古里先生からお話を伺いたいと思います。特別支援学校も定員がいっぱいという状況だと思いますが、いかがでしょうか。私も本学の学生から「妹が特別支援学校に転学しようとしたら、定員オーバーで断られてしまい、家族で困っている」という相談を受けたりしています。ぜひ現場の話をお聞かせください。

【古里委員（都立花畑学園）】

まず、特別支援学校へのニーズと言うところでは、特別支援学校の専門性を求めて来ています。その背景には、特別支援学級や通常学級にいる発達障がいのお子さんにどう対応していいかわからないというところもあって、だんだんお勉強が難しくなって、特別支援学校に来るということがあります。まだ開校して4年目ですが、教室が足りなくて新校舎を準備しているところです。インクルーシブということでは、通常学級の先生方の特別支援についてやユニバーサルも含めて、いろいろな対応ができるような

力をつけていただきたいと思います。ただ、一方で小学校や中学校の先生方がとても疲弊されていて、病休の方が多くて、副校長や校長が授業をしているところが少なくありません。教員は子どもたちと過ごす楽しい仕事で、病休になるなんて本当にもったいないというか、でもその先生からするといろいろなことに対応しなければいけなくなって、いっぱいいっぱいになってしまうだろうと思います。特別支援学校でも病休になる先生は一定数いて、特別支援学校では心のケアをやっているつもりではいるのですが、それでもなかなか一度病休になってしまうと復帰が難しいです。たぶん学校だけでなく、どの職場も人手不足で、それだけの問題ではないかもしれませんが、社会全体、学校だけではないと思います。学校はだいぶクローズアップされて、働き方改革ということで月に一回早く帰るようにと、30分早めて帰りましょうということをやっています。なかなか仕事が減らないというところがあります。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございます。実は大学生の私の娘が高校2年の時に1年間フィンランドに留学していたのですが、その時に、お世話になったお宅のホストマザーが特別支援学校の教員をしていました。娘の話によれば、先生もしっかり3週間休みがあり、旅行に行ったり、ゆっくり休むことができたそうです。帰国前に、娘が学校に帰国に必要な書類を出してほしいと思って、学校へ電話をしても全く電話に出なくて、なんとか校長先生のSNSを見つけ、連絡をしたところ「現在、学校は閉鎖中だから書類を出してと言われても困る、無理です。」とキッパリ

と断られたそうです。先生がしっかり休まない、こどもたちによい教育はできないというのがフィンランドでは常識のようでした。娘は、ホストマザーの勤務する学校も見学をさせていただいたのですが、障がい児のクラスとそうでないクラスが同じ敷地の中にあったそうです。また、職員室には先生が休憩できるようなソファが用意されており、やはり先生がしっかり休めないといい教育ができないという考えのようです。日本も先生の働く環境から見直す必要があるのではないかと思います。

日本の通常学級の中でも、特別な支援が必要なお子さんもいると思います。設楽先生は小学校の現場で特別支援学級を担当されていますが、いかがですか。

【設楽委員（千寿常東小）】

特別支援学級は児童8人で1クラスです。9人になると2クラスになり、教員は3人になります。通常学級の中で支援の必要なお子さんがいて「たいへんなんだよね」という話は聞いたことがあります。実際支援が必要なお子さんには1対1で対応しなければいけない場面が多いが、対応しているとほかの児童をどうしたらいいのかということで、悩ましいという声がよくあがっています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

40人を丁寧にみるのは、難しいですね。

【設楽委員（千寿常東小）】

実際、難しいです。コロナ禍の始まりの頃に、分散登校で児童が一日おきに登校して、40人学級だったら20人ずつ見られるという時期があったんですけども、その頃先生方が「とっても指導がしやすい」と言っ

ていて、これが続けばいいなと思っていたのですが、2ヵ月くらいで終了になりました。

【小谷部会長（東京未来大学）】

先日、本学にこども支援センターげんきから職員が来てくださり、医療的ケア児についての講義を聞いたのですが、保育士の資格を持った方が第三号研修を受けてお子さんの支援に入っているそうですね。

【設楽委員（千寿常東小）】

うちの学校では、なかなか通常学級で授業を受けることはなくて、休み時間は危ないので教室にいますが、ほかの支援学級の児童は休み時間に外でみんなで遊んで、通常学級の子とも一緒に遊んでいます。かわりがあるので廊下ですれちがって挨拶をしたりするので、かわりがあると一緒に活動をするときに、支援級の子だから〇〇はできないよね、ということこそそこそと話してくれて、小さいころから壁がない状態でかわれることが重要だと感じています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございます。それでは、入学前の保育園の段階ではいかがでしょうか。

【梶原委員（本木保育園）】

保育園の中では、こどもが小学生になると障がいということがわかってきますが、その前の段階で、個性ということでそういう感覚でこどもたちは受け止めていると思います。私たちも、その子だけがということではなく、みんなすべてのこどもが持っている個性ということで、こどもたちには伝えていきますし、かわるようになっています。一人ひとりそれぞれちがって、いいところもあれば苦手なところもあるということ

対応していくように心がけています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

小さいころだと、保育園に通いつつ夕方から療育に通う方もいますね。

【梶原委員（本木保育園）】

夕方と言うか、たとえばあけぼのさんに月に2回集団と個別に通ったり、あしすとに1ヵ月に1回行く、あとは音楽関係の療育に行っています、というように併行している方もいます。

【小谷部会長（東京未来大学）】

今、足立区の中で児童発達支援と保育園が同じ建物で保育をしているという施設がありますが、障がいのあるお子さんと健常児と一緒に過ごすというのはいかがでしょうか？

【梶原委員（本木保育園）】

保育園自体が、障がいのあるお子さんと一緒に保育をしていますので、一つのクラスに障がいのある子も混在しているので、そういう関係性が必要だし、こどもたちも互いに刺激をもらって成長していると思います。こどもなので本当に正直に嫌なものは嫌だし、だめなものはだめで、その子だけ甘えさせてあげようとか許してあげようみたいなそういうところまで成長していないと、本当にストレートにぶつかり合って、お互いに我慢しようかなと思ってそれを力にしていって、そんな時期かなと思います。このあとは小学校に行くわけですが、特別支援学級や特別支援学校を検討していく、保護者がいろいろなところを見て、こどもが一番幸せに過ごせる、二次障がいのようになって、自分がだめなんだと思うような場所ではあるということではなく、お子さんが幸せに過ごせる場所を探していきたいと思います。

うということ、一緒に考えています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございました。

今日は傍聴の方も2名いらっしゃっています。よろしければひと言お願いいたします。

【傍聴】

千葉県の相談支援の現任研修で傍聴に来ました。いつもは西新井にある計画相談の事業所で相談支援員として勤務しています。

こどものころの経験等が重なり合って障がいがある、就労が難しい方の支援もしているので、今日のお話が参考になりました。

【傍聴】

今日はありがとうございます。私は足立区の放課後等デイサービスに勤務しています。もともと学童等で20年近くこどもの支援をしてきましたが、現場で障がいのある子を丁寧にみることができないと感じていて、ここ5年くらい障がいにかかわる仕事をしています。その実践研修の課題で本日見学に来ています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございました。

では、続いて酒井委員をお願いします。

【酒井委員（うめだ・あけぼの学園）】

今、障がいのあるこどもたちの支援状況が大きく変わっていて、国としても大きく動かそうとしています。こども家庭庁ができたことで、われわれの所管が厚生労働省からこども家庭庁に変わったということがすごく大きなことだと思います。そして、こども家庭庁の職員と話をして、今まで保育課も厚生労働省の中にありましたが、保育課と障がい児支援の担当が、フロアが分か

れていてお互いに連携が必要なのに物理的な距離があって、結局物理的な距離があれば心の距離もできてくるというか、連携にも物理的な壁が生じているところがありました。それに対してこども家庭庁は、広いフロアを3フロア使っているのですが、障がい福祉のすぐ隣が虐待予防、上がるとすぐ保育課があって、非常に明るくなって行き来がしやすく、やりやすくなったと聞きました。保育課が地域の施策を考える時に障がい関係のことが必ず入ったりということで、連携がかなり進んでいると感じます。以前あった、幼児教育の無償化の時も障がいの方が外されていたりということは、これからは多分起きないと思います。そういう意味でもこども家庭庁になったのは大きなトピックスかなと思います。もう一つ、障がい児支援で大きく動いているのは、国の方で大きな検討会が、一昨年と昨年の2回も開かれているんですね。これは異例なことです。こども家庭庁になって、今年は障がい児支援だけではなくいろいろな領域にまたがるかたちで検討会が開かれていました。一番上で確定したのが「こども大綱」というのが定められて、それによってこどもの施策はすべてこれに基づいて作られていくことになり、すごく大きなことです。それから、こどもの居場所を作ることが明示されています。思春期や若年層も含めた彼らの居場所をしっかりと社会として考えていかないと、彼らが健やかに力を発揮することができないのではないかと、そうしないと反社会的な、あるいは非社会的なところに近づいて行ってしまう、思春期から若い人たちのモラトリアムということをしっかり考えた上で居場所を用意していくことが重要だ

ということが、国を挙げて確認できたということがすごく大事だと思います。そんな中で障がい児支援がどんな役割を果たしていくのかというのは、実は大きな意味合いがあって、特に児童発達支援センターに対しては大きな機能強化が求められていて、役割が強化されることになっています。あけぼの学園については、これからどうしていこうかというところで、特に今日のテーマである地域との連携ということで考えるとわれわれのような児童発達支援センターが中核となってみなさんとどんな連携をもっていけるのかということ具体的に考えなければいけないと思っています。この場で解決できることはなんだろうと考えてみました。この場で解決できないことは、例えば学校の先生の忙しさは自立支援協議会ではどうにもならない、大事な話だしすごく大きなことですが、自立支援協議会でいくら議論したところで、何の権限もないし何の解決にもならない。では、自立支援協議会でなければ解決できないことは何だろうということを考えてみました。そのうちの一つとして、このようにみなさんと顔を合わせて連携するきっかけを持つことなのかなと思っています。たとえば民生委員の方はあけぼの学園を見たことがありますでしょうか。たぶん見たことない方が圧倒的に多いと思います。たとえば民生委員の方みなさんに来ていただいて、年に数回見学会を開いて、そのお声がけを相澤政子委員にお願いするとか。

【相澤政子委員（民生委員）】

実は先週施設の見学に行きました。その際にほかの施設も見たいということをお願いしました。

【酒井委員（うめだ・あけぼの学園）】

われわれが顔を合わせることで連携が深まるということはあると思いますが、もっと大勢いる民生委員の方々とあけぼの学園、地域のこどもや家族と近くにいるのが民生委員なので、その方たちと援助を届けに行くとか。またお隣の父母の会やメンターの方と、学園の現役の保護者をどうつなげばいいのかということはずっと考えています。親の会の大きな課題は、お子さんたちの年齢が上がっているということです。保護者の方の課題解決する年齢がどんどん上がってきてしまって、乳幼児期のことがなかなか扱いにくくなっている。今、あけぼのを利用している、まだ小さいお子さんを抱えている保護者のニーズはみなさんの頃と変わっているかという、変わっていないんです。人とつながりたいというのは変わらないのですが、つながり方のスタイルが変わってしまって今の保護者はSNSを使いながらつながりを求めている。ニーズそのものはそんなに変わってなくて、孤独になるとつらくなったりさびしくなるので、つながりたい、つながっていたいというのがあるけれども、つながり方のスタイルがちがう。また、温度差があるというか、べったりずっといるというのではなく、ほどよい距離感でつながっていることを求めるような時代になっていて、つながることへのニーズはあると思います。お子さんを育てた経験は財産ですので、その財産をどのようにしたら今の保護者に伝えられるのかということを考えています。われわれの同業者とのつながり方、学校や保育園とのつながり方、また児童養護とのつながり方、それぞれつながり方の質がちがうと思います。せっかくい

ろいろな方がいるので、自立支援協議会の中で連携ということを具体的にすすめる方策とは、と思いながら聞いていました。たとえばこの協議会も1回は学園で、もう1回は城北分園で、1回は花畑学園で開くというような、自立支援協議会でないとできないことがあると思います。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございます。いろいろとご提案いただきました。

開催場所を変えるのは、施設見学もできるのでいいですね。機会があれば東京未来大学にも来ていただきたいです。

では次に、保健センターの方に保護者のニーズが変わっているのか、また障がい受容や東京女子医大ができて周産期のかかわりなどいかがでしょうか。

【工藤オブザーバー（竹の塚保健センター）】

地域の保健師としていろいろな機関と連携していることは今までもありました。ニーズに関しては、保護者が困っていることはたくさんあり、子育てに関してや自分のうちだけがといった相談を受けることはあります。情報をもらいたいという方や、逆に情報がありすぎて心配になっている方もいて、「発達障がいではないか？」という相談もあります。また、東京女子医大ができて特定の相談が増えたということはありませんが、病院から連絡を受けて支援の体制を組むということはしています。そのようなときに、いろいろな機関と連携し、医療機関と一緒に保護者の精神的な面での支援にかかわっています。健診として3歳までしかしていないので、おおむねそこまでのかかわりになりますが、場合によってはそれ以降も、発達の心配がある方は、健診時に心理相

談を受けていただいて、フォローして、こども支援センターげんきにつなぐということもしています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

地域による違いというのもあるでしょうか。また、産後ケアのシステムやショートステイの利用など、いかがでしょうか。

【工藤オブザーバー（竹の塚保健センター）】

妊娠届の提出を受けて、妊婦面接をして状況の把握をしています。必要な方には継続的にかかわっています。出産という大きなイベントなので、産前から支援をして、産前・産後の切れ目のない支援を続けています。具体的な数字には表れていませんが、早めに対応できたり、相談相手がいるということでは虐待の防止や減少にも寄与しているのではないかと思います。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございます。少子化については、足立区はどうですか。

【工藤オブザーバー（竹の塚保健センター）】

出生数は減ってきています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

続いて、民生委員のお立場から相澤政子委員お願いいたします。

【相澤政子委員（民生児童委員）】

先日ひまわり園へ施設見学に行きました。パンの製造等の作業をされていて、利用者の方に声をかけたら「やったー」とお返事があり、一生懸命に取り組まれているところを見せていただけて良かったと思っています。もっと地域での理解を深めていきたいです。また、新しい施設ができていますが、居場所としてどんどん増えてほしいと思います。

【小谷部会長（東京未来大学）】

相澤委員は、放課後等デイサービスにご

勤務とのことですが、対象のお子さんは？

【相澤政子委員（民生児童委員）】

小学校1年生から高校3年生までの知的障がいのお子さんです。昨日はホットケーキ作りをしましたが、いろいろな経験をすることで自信をつけてほしいと思っています。気持ちが安定しないお子さんもいますが、その子の個性として見守るしかないと思います。保護者のお悩みもこどもの成長とともに変わってきます。反抗期の相談もあり、保護者に寄り添うようにしてお話しています。民生児童委員として勉強会をしています。民生児童委員として勉強会をしていますが、もっと障がいについても勉強する機会がほしいと思っています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

川松委員、いかがでしょうか。

【川松委員（ねっとワーキング）】

小学校に入る半年前に足立区に引っ越してきたときに、近所に声をかけてくれる民生委員の方がいて、あいさつだけでもとてもありがたく感じました。地域での安心感につながっていて、味方になって見てくれる目があるというのが本当に大きいです。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございます。続いて、児童発達支援事業所のお立場から、相澤まり子委員お願いします。

【相澤まり子委員（ハートぼっぼEAST）】

うちは肢体不自由のお子さんを対象とした放課後等デイサービスです。現状では、来年度は新規の方を受けられない状況です。というのも、肢体不自由のお子さんが利用できる施設が圧倒的に少ないです。4月に法改正があつて、縮小を検討している事業所のお話も聞いています。知的障がいのお子さんを対象にしている事業所とも情報交

換していますが、なかなか厳しい状況です。

【小谷部会長（東京未来大学）】

18歳以降については、どのようなになっているのでしょうか。

【古里委員（都立花畑学園）】

特別支援学校の高等部を卒業した方は、作業所等に行かれています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

では保護者が働いていた場合、就労ができなくなるということもあるのでしょうか。

【古里委員（都立花畑学園）】

困るという話は、聞いたことがあります。

【佐藤委員（足立区手をつなぐ親の会）】

生活介護事業所を利用する場合は、時間が短いので、仕事をやめたり短時間勤務にした方もいます。最近は生活介護事業所が増えてきて、小規模のところでは時間が長いところもあります。新しく4月にできるところは、送迎バスを運行して9時から17時とか必要に応じてもっと長時間利用できるという話も聞いています。足立区外の草加市の事業所を利用している方もいます。今年度の入所調整の状況からすると入れることが多いと思います。

【小谷部会長（東京未来大学）】

知的障がいについては、受け入れ枠があるということでしょうか。

【古里委員（都立花畑学園）】

肢体不自由部門の保護者からは、肢体不自由のほうが少ないということを聞いています。

【相澤まり子委員（ハートぽっぽEAST）】

年少のお子さんの保護者から就学の時の枠についてご相談があったんですが、お約束できない状態です。肢体不自由のお子さんを対象にした事業所が増えるというお話

も出たんですが、頓挫しているというのがここ数年の状況です。お子さん10人に対して、スタッフ7、8人で支援していますが、お子さんに合った個別支援計画を作成した上で、身体・コミュニケーション・保護者・地域連携等といったことを求められていて、やはりマンパワーが必要です。人手不足に関しては、どこの事業所も深刻です。先日、技能実習生を受け入れる事業所のことを聞き、新しい取り組みだと思いました。

連携ということをととても大切にされていて、この会に参加することでつながりができたことがうれしいです。

【小谷部会長（東京未来大学）】

酒井委員いかがでしょうか。

【酒井委員（うめだ・あけぼの学園）】

今、人口減少が進んでいる中で、人を確保することが簡単なことではない、またこの業界の人件費が上がらない、給与が上がらない問題が大きいです。熊本に台湾の半導体の企業が工場を建設して高いお給料を出したら人が集まったということで、どこから来たかという福祉からということでした。介護事業所からごっそり人がいなくなって、現場がとても苦勞しているということでした。よく言われることですが、残念ながら理念だけでは飯は食っていけない、ということで、若い方たちが自分の人生計画を考えたときに福祉はやれないという声はずっとあがっています。それが今回の報酬改定の際に介護のほうから厚生労働省に声が寄せられてきているので、介護のアップ率は相当高いと聞いています。

われわれが現場でできることは、魅力を伝えていくこと、こどもたちのすばらしいところをどうやったら見てもらえるか、伝

えていけるかということをしっかりやっていきたい、そういうことを現場から発信し続けたいと思っています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございました。

続いて五十嵐委員お願いいたします。

【五十嵐委員（都立北療育医療センター城北分園）】

城北分園の機能は、外来部門と医療型の児童発達支援センター、通所のリハビリ部門です。ニーズとしてはありますが、スペース等の関係ですべて受け入れることは難しいです。そうなると一日に受け入れる人数を調整することになります。週5日受けたいという思いはありますが。通園は親子通園であるため、ニーズはあるが保護者が働いているという理由から通園を利用できない家庭もあります。保育園との併用を可能にし、週1回でもいいのでと利用を勧めています。両親が働いている場合は、送迎がある事業所を利用することになります。一方で家族支援ということを考えると乳幼児のころから預けていると、朝晩家で対応するときに抱き方もわからないということがあるようです。親子通園で家族支援も含めてやっていくことが必要だと思うが、現実には難しい面もあります。最近、知的障がいのお子さんや保育園・幼稚園に通っているお子さんもいます。外来部門では保育所等訪問支援の制度もあるため、スタッフが園に出向いて先生と対応を協議することもあります。4月以降については、引き続きおこなっていきます。一元化に伴い、今まで医療型ではやっていなかったこともやることになるので、忙しくなるかと思います。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございました。幼稚園はいかがでしょうか。補助金等は。

【寺山委員（足立つくし幼稚園）】

課題のあるお子さんを受け入れることで、人件費として東京都からの補助金がありますが、足りないので、自治体によって上乗せしてくれるということがあって、私たちも自治体に働きかけているところです。ただ、お金があってもまだ足りないということと、人が見つからない、人の確保が大変難しいです。専門の知識を持つ人だけでなく、幼稚園教諭や保育士の資格を持つ人の確保が難しいです。最近の幼稚園では支援が必要なこども、障がいのある子だけでなく、いわゆるグレーゾーンのお子さんで小学校で不登校になる子がいます。小学校の先生もがんばっていらっしゃるが、40人学級だとお手伝いしてくださる方がいないと、授業が面白くなってしまって、落ちこぼれてしまったり、ということをよく聞きます。ちょっとした支援が必要な子が増えているので、行き場所が足りなく取りこぼされてしまう、ということ卒園した保護者から聞くことがあります。幼稚園でも2歳以下のお子さんの預かり保育が可能になったので、3歳から5歳のお子さんだけでなく、その前後の年齢のお子さんとそのご家族への支援ということを考えて、みなさんと連携しながらいろいろなことができるのではないかと考えています。支援の必要な方のニーズも変わってきているので、対応できるように幼稚園も取り組んでいきたいと思っています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

小学校の現場ではいかがですか。

【設楽委員（千寿常東小学校）】

特別支援学級4年目なのでそれほど詳しいわけではありませんが、通常学級で授業中立ち歩いたり等、対応が難しい場合に支援学級に転学することはあります。大人のかかわりが増えることで落ち着く子もいます。通常学級でついていけなくなったお子さんが、支援学級になって安心感があるのか、甘えたりするというケースもあります。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございます。

特別支援学校ではいかがでしょうか。

【古里委員（都立花畑学園）】

特別支援学校は、お子さんのニーズに合わせてある程度学習内容を作ることができます。小学校を巡回していて、発達に課題のあるお子さんが立ち歩いたりという場合に、足立区ではスクールアシスタントという制度があります。その判定のために、小学校に行きましたが、ユニバーサルデザインということで、先生がこどもの集中できる時間を考慮して、タブレットの使用に切り替えたり、次はゾーンにわかれて学習する、といったことをしていました。発達に課題のある子も「がんばっているね」と声をかけて上手にやっていらっしゃる先生がいました。工夫次第で、発達に課題のある子も参加できる授業ができると思いました。

I T化が進んでいて、それで補えることもあると思いました。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございました。では、まとめに入っていきたいと思います。

（3）今期のまとめについて

【浅輪（障がい福祉センター）】

障がい福祉センター幼児療育支援担当係長の浅輪です。

このこども部会は、2年間同じメンバーで継続して実施してきた2年目の最後の回です。始まったころはコロナ禍でこのような対面もままならない中でしたが、今日はこのように大勢の方にご出席いただき、それぞれのお立場でテーマについてかなり突っ込んだ意見の交換をしていただけたと思います。

コロナ禍でいろいろ停滞していたことが、コロナ禍が明けたことで少しずつ進んでいく、その変化にこちらでも対応できるしくみを作っていかなければならないのかなと思っています。今日ご発言いただいた委員の方もお感じになっていることかと思います。先ほどこども家庭庁ができて、というお話もありましたので、今後そういった変化にわれわれがどのように対応していくのか、たとえばあしすとのことと言えばこれまで集団通所部門も園との併用をしないで、あしすとだけに週3日または5日通ってくることを前提にしていたことが、保護者の就労や園に入りやすくなったという事情もあり、保育園や幼稚園に通いながら療育を受けたいということで、今年度から試行的に園と併用できるクラスを始めたところたいへんご好評をいただいていた、来年度も希望者が多くいらっしゃいます。療育を必要とされる方のニーズに合わせたメニューですとか、お子さんの療育だけでなく保護者支援や経済的な支援について、また外国につながる方のあるご家庭への支援など、この部会に出席している機関が中心となって、いろいろな機関が支えていくことで一つはお子さんに適切な時期に適切な支援が届く、もう一つは保護者が安心して子育てができる、ということが今日のテーマである「一生

穏やかに過ごす」ためのベースとなる自己肯定感をお子さんにも保護者にも持ってもらえることにつながると感じました。

【杉山（障がい福祉センター）】

ニーズの変化ということでは、保護者の就労や園の受け入れということもありますし、こどもたちの状況も今までとは少し変わってきているということは想像できるので、そこについての支援をしていく必要性があると思います。地域支援については、コロナ禍以前は、保健センターで健診等からつながってくる親子支援グループというのがあって、そこにあしすとから職員が行って支援するというのがありました。区内5か所の保健センターで実施していたので、あしすと地域支援としては重要な活動だったのですが、コロナ禍で中断していたので、再開や新しい地域支援を考えていきたいと思っています。

【小谷部会長（東京未来大学）】

本日の話をまとめますと、「顔の見えるつながり」ということが大事ですね。今までは「切れ目のない支援」ということで、こどもたちを中心に見ていましたが、地域のネットワークを活性化させることも大事で、支える側も、当事者も含めて繋がっていくということがテーマになるのかなと思います。今回、区内に不登校のお子さんを対象にした学校があらたにオープンし、隣には児童発達支援センターができる予定です。

それぞれの機関を知るという意味で、この部会もさまざまな機関を会場として実施できればと思います。

【山本委員（障がい福祉センター）】

会場については、関係機関での開催も可能ですので、検討させていただきたいと思

います。

【小谷部会長（東京未来大学）】

ありがとうございます。今後調整していきましょう。よろしくお願いいたします。

（４）事務連絡

【司会】

小谷部会長、委員のみなさまありがとうございました。

会議議事録につきましては、事務局で案を作成いたしまして委員の皆様には後日お送りします。ご確認いただいて、お戻しいただいたものをもとに修正し、足立区ホームページに掲載させていただきます。また、今期のまとめについては、本会議の際に小谷部会長よりご報告いただく予定です。

３ 閉会

【司会】

以上をもちまして、令和5年度第3回足立区地域自立支援協議会こども部会を終了させていただきます。本日はありがとうございました。お帰りの際にはお忘れ物などないようお気をつけください。